

# 駒場友の会

## 会報第10号

### 駒場友の会第四回演奏会

駒場友の会主催による第四回演奏会が、十一月十四日(水)十八時より、駒場コミュニティセンター・プラザ音楽実習室にて開催されました。演奏は、ロシアの若手ピアニストのユリア・チャプリナさん。駒場友の会主催第二回演奏会に出演して下さって以来二年ぶりの駒場。二〇歳になっただばかりのチャプリナさんですが、来日直前に発売されたCD「バダジェフスカ・ピアノ作品集―乙女の祈り―」が新聞で紹介されたこともあって、注目度は高く、友の会演奏会の切符はあっという間に「売り切れ」となっていました。会場は開演前から熱気に溢れ、シルバードレスをまとったチャプリナさんが



「乙女の祈り」を弾き始めると、その美しい音楽に一同引き込まれました。バダジェフスカの四曲につづいて、シヨパンのバラード第一番と第四番。休憩の後、パッヘルベルの「カノン」(リヤブノフ編曲)、パッハの無伴奏ヴァイオリン・バルティータ第三番(ラフマニノフ編曲)、スクリャービンのピアノソナタ「黒ミサ」、チャイコフスキーのバレエ組曲「くるみ割り人形」(プレトニョフ編曲)から「こんぺい糖の踊り」など三曲が演奏されて予定のプログラムは終わりました。鳴りやまない拍手にこたえて、チャプリナさんが流ちょうな英語で挨拶、小島学部長がロシア語で謝辞を述べられた後、シヨパンのエチュード第二四番の演奏があり、終演となりました。

### 駒場の樹木をめぐる

#### 講演会とイベント

平成十九年度のホームカミングデイが、十一月十日(土)に開催され、駒場友の会主催による駒場の樹木をめぐる講演会が行われました。この講演会も本年で三回目になります。今年度も、過去二回講演をお願いした大学院農学生命科学研究科教授・北海道演習林長の梶幹男先生に講演をお願いしました。今回の講演題目は「ブナ学ことはじめ」でした。講演会を昨年に引き続き駒場コミュニティセンター・プラザで行い、その後、駒場の樹木にネームプレートをつけるイベントを、



会場のコミュニケーション・プラザと駒場図書館の間の広場で行いました。当日は、昨年同様、雨の荒れ模様の天気、残念ながら講演会は少し予想を下回る人数でした。

講演内容は、昨年の「カエデ学ことはじめ」に続く、ことはじめシリーズで、今年は、ブナが取りあげられました。ブナは、日本の伝統的な里山の樹種ですが、その分布の特徴が豊富な写真で説明されました。また、今回は、演習林でのフィールドでの研究内容の紹介もあり、北海道の北限の分布が何によって決まっているかなどの研究成果が興味深く語られました。今年は幸いにも、天候が小雨程度までには回復し、プレート掛けのイベント

を予定どおり行うことができました。今回プレート掛けを行った場所は、旧駒場寮の建物のあったところで、幾つかの貴重な大木が残されています。皆さんも今回のプレートを参考に駒場にどのような木があるか、巡ってみてください。

### 教養学部正門修復募金報告

長年、駒場のシンボルとして親しまれてきた教養学部正門は、昭和十三年に旧制第一高等学校の正門として建設されましたが、昭和二十四年の新制東京大学発足に伴って教養学部の正門となり、現在に至っていました。

この門は、長年の風雨や毎日の開閉のために損傷が著しく、柏葉章(鑄鉄製)が脱落するなどして危険な状態にあることから、教養学部は、原形の通り門扉を



復元製作する方針を立てました。門扉は檜の一枚板を組み合わせた扉四枚からなる構造で、製作と設置に非常に多額の資金を要します。駒場友の会は、一高同窓会や教養学部ベテラン会と協力して、費用の一部に充てるための募金を実施し、多数の方々から貴重なご寄付をいただきました。

昨年十一月十六日に古い門は撤去され、現在は仮門が設置されています。新しい門は三月下旬に設置される予定です。今回ご寄付をいただいた駒場友の会の会員・会友、ベテラン会の方々のお名前は以下の通りです。心より感謝申し上げます。

明石 康	秋田 安代	遠藤 郁夫	大内 江公	酒谷 聡	坂本 敬子	東ヶ崎 民代	戸栞 晴彦
秋山 弘美	秋山 みゆき	大岸 良恵	大島 哲也	櫻井 捷海	櫻井 浩之	十時 慶子	十時 博信
浅井 清成	浅岡 宏子	大津 信行	大塚 哲子	櫻田 鐵之助	佐々木 公子	戸根 修	戸根 美智子
浅島 誠	浅野 攝郎	大森 玲子	岡藤 光子	佐々木 泰三	佐藤 幸喜	利根川 徳吉	富井 明子
浅見 俊雄	足立 利子	小川 猛	小川 正孝	佐藤 純一	佐藤 節子	利根川 晴雄	友田 修司
安達 裕之	阿部 龍藏	尾崎 博子	小沢 惠津子	佐藤 哲夫	佐藤 俊夫	永岡 利之	中川 章
安藤 忠雄	荒木 昭太郎	小田嶋 豊	落合 卓四郎	佐藤 浩子	佐藤 博俊	富田 晴雄	中川 浩二
五十嵐 一美	飯野 泰子	小野 悦子	小野 治	佐藤 正彦	佐藤 良明	中里 寛	中嶋 寛之
石井 恵子	石井 全	小野 隆	小原 弘行	佐藤 頼子	佐藤 栄二	中野 克己	長塚 三喜男
石川 聖二	石黒 悦子	小尾 信彌	小瀨 裕子	佐藤 繁樹	志田 綾子	中野 健二	中野 久美子
伊豆山 健夫	一澤 宏良	笠田 守	風間 勝昭	篠沢 恭助	柴山 尚士	中村 健二	中村 龍雄
市村 宗武	伊藤 薫	笠間 憲二	鍛冶 哲郎	嶋 幸枝	島田 猛	中村 健二	中村 保夫
伊東 俊太郎	伊藤 弘高	嘉治 元郎	勝俣 鎮夫	清水 祈	清水 國	中村 健二	中村 保夫
伊藤 文影	伊藤 芳子	加藤 栄	加藤 信吾	光下 薫	庄野 邦彦	中野 克己	長塚 三喜男
今堀 和友	井村 順一	金子 信子	兼子 晴久	朱牟田 静雄	白石 耕三	中野 克己	中野 久美子
入谷 きよ子	慶田 雅洋	加野 象次郎	川井 光子	白石 喜久夫	菅原 正	中野 克己	中野 久美子
岩田 一政	岩堀 厚司	川喜田 正夫	川口 昭彦	新川 健三郎	菅原 正	中野 克己	中野 久美子
岩本 振武	岩本 文明	川口 順子	川口 順子	杉浦 美智	菅原 正	中野 克己	中野 久美子
上野 紘機	植村 博昭	菊地 進	菊地 佐知子	杉山 忠一	菅原 正	中野 克己	中野 久美子
植村 優子	白田 裕	岸谷 清香	岸谷 徹子	鈴木 禎宏	鈴木 賢次郎	中野 克己	中野 久美子
宇津木 光世	宇野 敏行	岸谷 徹子	木村 武二	鈴木 直方	鈴木 美奈子	中野 克己	中野 久美子
梅本 吉彦	江口 裕子	岸谷 徹子	釘宮 徹郎	数土 直方	須藤 一美	中野 克己	中野 久美子
		岸谷 徹子	久保 隆彦	関原 朗	世古口 宣子	中野 克己	中野 久美子
		岸谷 徹子	熊谷 光子	千代 英毅	曾部 貴弘	中野 克己	中野 久美子
		岸谷 徹子	倉澤 みどり	平 剛美	高橋 和彦	中野 克己	中野 久美子
		岸谷 徹子	黒岡 久美	高橋 照美	高橋 正征	中野 克己	中野 久美子
		岸谷 徹子	黒田 善雄	高橋 眞理	高橋 満	中野 克己	中野 久美子
		岸谷 徹子	桑原 佐用子	高橋 孝光	高橋 佳子	中野 克己	中野 久美子
		岸谷 徹子	神品 芳夫	宅間 宏	竹内 覚	中野 克己	中野 久美子
		岸谷 徹子	古賀 美智子	竹内 敬人	武富 保	中野 克己	中野 久美子
		岸谷 徹子	小島 憲道	竹内 隆	田島 万紀	中野 克己	中野 久美子
		岸谷 徹子	古城 佳子	辰 紘	立松 俊彦	中野 克己	中野 久美子
		岸谷 徹子	小谷 行雄	田中 千鶴	田中 洋	中野 克己	中野 久美子
		岸谷 徹子	小林 久美子	種子田 敬	谷口 紘	中野 克己	中野 久美子
		岸谷 徹子	小林 敬幸	千貫 映子	林 弘行	中野 克己	中野 久美子
		岸谷 徹子	小林 敬明	塚本 健	林 利彦	中野 克己	中野 久美子
		岸谷 徹子	小堀 桂一郎	辻 理	原田 健	中野 克己	中野 久美子
		岸谷 徹子	小山 幸夫	筒井 若水	原田 義也	中野 克己	中野 久美子
		岸谷 徹子	近藤 雅子	堤野 みどり	日向 忠久	中野 克己	中野 久美子
		岸谷 徹子	齋藤 毅	坪井 均	兵頭 俊夫	中野 克己	中野 久美子
		岸谷 徹子	齋藤 みね子	手嶋 良夫	出口 努	中野 克己	中野 久美子
		岸谷 徹子	酒井 哲哉	田 朝子	比留川 勝	中野 克己	中野 久美子
		岸谷 徹子		遠山 敦子	福島 直之	中野 克己	中野 久美子

福住 裕子	藤井 志保美	藤尾 天右	藤崎 源二郎	藤島 牧子	藤田 秀光	藤本 尚道	穂苺 真里子	保坂 一夫	本間 長世	本間 康之	前田 寛二	前田 敦子	榎 則子	増田 邦子	増田 セイ子	増田 真理子	松浦 雅恵	松尾 浩也	松岡 澄代	松田 健一	松中 由美	松本 忠夫	松本 八重子	三浦 伸夫	三浦 和彦	水本 深喜	三浦 洋一	三宅 文男	宮川 雅雄	宮田 和子	宮田 泰行	宮田 昌子	武藤 裕子	村井 民子	村瀬 サエ子	村田 弘之	村田 信和子	村山 建夫	毛利 秀雄	森川 健二	守田 泰久	森永 光雄	森本 清蔵	森本 賢悟	矢島 賢悟	安原 明子	矢野 岳	山内 幸	山岡 憲夫	山口 久美子	山口 良三	山口 勝之	山崎 泉	山下 玲子	山下 泰	山本 厚子	山本 勝雄	油井 大三郎	横山 達正	横山 達彦	横山 昌克	吉富 哲夫	吉安 早女	米倉 満	米田 穰	若林 秀夫	和田 和美	渡邊 晴美	渡邊 一司	渡邊 正男	綿坂 邦彦	啓	S 32	L I - 3	B
-------	--------	-------	--------	-------	-------	-------	--------	-------	-------	-------	-------	-------	------	-------	--------	--------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	--------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	--------	-------	--------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	------	------	-------	--------	-------	-------	------	-------	------	-------	-------	--------	-------	-------	-------	-------	-------	------	------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	---	------	---------	---

合計金額 三三五名(敬称略)  
 二三四〇万八千円

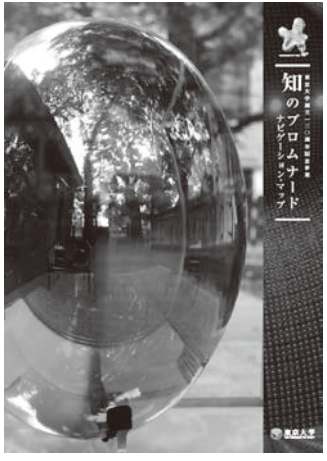
### 教養の道、そして歴史の道

浅島 誠

昨年は東大創立百三〇周年記念の年であった。百三〇年にちなんで東大では学内外はじめ東大の創立百三〇周年記念事業として国際シンポジウムも百五〇余り開催されると同時に東大の海外拠点も百三〇カ所余りを越えて、国際的にも大きく活動の場を拡げて行った。このほか小宮山総長のアクション・プランによる学生企画イベント、国際会議、教育や研究活性化のシステム作りなど、昨年一年間は東大にとっても激動の年であったと思う。

そのような中で、小生は昨年三月に東大を定年退職した後、四月より古田、高橋両理事の御退任に伴って、その重責を負うことになった。つまり、古田元夫理事の行っていた教育、留学生、学生担当と佐藤慎一理事の行っていた国際の担当となったのである。前任のお二人の理事は真面目で、きちんとまとめ、ことを順序立ててやる方であったので、不器用な私などその四役を一人でやるにはあまりにも任が重すぎる。

そのような一連の動きの中で、小宮山総長は東大のキャンパス(駒場、本郷、柏白金)に「知のプロムナード」をつくることを提唱された。キャンパスの特色を「知」でもって表現しようとしたものであった。駒場はIとIIの二キャンパスからなるが、ここでは駒場I(教養学部)



のキャンパスについて述べる。駒場にはいろいろな名所があり、記念の場所もある。それらの中で何と云っても一号館裏のあの一直線中央道の銀杏並木は四季折々に私達の心を豊かにし、又、自然の美しさを感じさせてくれるものの一つであろう。毎日通るあの道が「教養の道」と命名された。一番西側は坐禅堂に端を発し、東側は旧一高駒場寮跡地に見事に建設された学生の福利・厚生施設である駒場コミュニケーション・プラザにつながるおよそ五〇〇mの道である。駒場キャンパスに由緒ある知の「教養の道」の名が与えられたことを誇りに思っている。

もう一つは「歴史の道」である。それは正門前に聳える本館(二号館)を中心にし、左右対称に建てられている駒場博物館と九〇〇番教室(一高時代の倫理講堂)、一〇一号館、本館の裏にある護国章、正門扉の一高時代からの柏葉章、農学の碑、一高ここにありきの碑、アリヴェ先生とブッチール先生の銅像、嗚呼玉杯之碑など旧農学部跡地と旧制第一高等学校

の記念建造物を中心にしたものである。まさに、東大のもつ教養学部の前身の一高の精神を引き継いだ重みと学問の礎の「歴史の道」である。駒場キャンパスの所々に一高の伝統の面影と新制の東大教養学部的重要性を「教養の道」と「歴史の道」として残すことができたことは、次世代の若い人達が育つ教養学部にとっても良かったと思っている。

私は「東大百三〇周年ガイドブック」の中で、東大で一番好きな場所はと問われた時に、駒場の野球場のグラウンドの周囲の自然、とりわけ桜並木と書いた。なぜなら、その奥まった自然の中に私の研究室があり、いつもこの景色を眺めながらイモリやカエルを相手に研究と教育ができたからである。このような素晴らしい自然と文化、学問に満ちあふれている駒場キャンパスはこれからも自然と学問、そしてそこにいる人々が調和しながら最高の学府として発展していつて欲しいと願っている。

(国立大学法人東京大学理事、副学長)

### 駒場のDNA

五十嵐 雅子

なにげなく想い出す駒場は三〇年前、女子学生は学年三千名のうち九〇名ほどと記憶している。このあたりから、めずらしい生き物としての扱いを受けてきたような気がする。自ら進んでそうなったのではない。このなりゆきなのである。

そのなりゆきのままこのところ、学校づくりに励んでいる。昨年は「渋沢記念深谷人づくり特区」ということで、広域通信制の創学舎高等学校を立ち上げた。不登校、中退者を対象とした学校である。そこで、二つの刺激的な出会いがあった。これまでは東京生まれの東京育ち、地方や地域行政という言葉は生活の中になかった。構造改革特区ということで、深谷市の市長や市役所の行政マンとの協力体制が始まった。そこで実感された一極集中都市東京と人口十四万の近郊中都市深谷といういわゆる地方のギャップは、まといつく赤城おろしのどこかやさしい激しさといまって、新しいアイディアを生みつつけるもとなつた。

もうひとつの出会いには、生徒たち。それぞれの個性とそれぞれの事情のなかで、あやうげに生きる努力をする若者たち。私にとってはアパセティックな学生に慣れた大学教授の日常から、どこかひたむきな彼らを受け止める校長職への変身の一時である。

そして、次の学校づくりは、市長の今年の夢であった深谷市での大学、東都医療大学(仮称)。専門とは遠い医療分野にいつのまにか入り込んでいるのもなりゆき、教養学科だから何でも応用できるのだと駒場にこじつけてみたくなる。

豊かな日本に対する疑いの中で、健康や長寿がもてはやされている。医療の役割もキュアからケアへといわれ、QOLさらには満足感や意欲までが、幸福とい

うチームのまわりを廻っている。客観性再現性を旨とする医学の分野で新たな治療法が開発されるたびに、コメディカル(医師と共に働く医療技術者)にも波及及ぶ。破綻の懸念される医療保険制度を支えようと厚生労働省が動けばまた、医療や保健の軌道修正を招く。今回は現実の社会と密着したこうしたシステム世界をのぞき見るチャンスでもあった。

おもしろそうですね、といわれ五年目になるプロジェクト、笑い学講座は、「笑いと健康学会」へ発展した。健康に優れて役立つとみなが認める笑いの効用を、医学的に説明することがその課題である。協力いただいている吉本興業とのお付き合いも六年目にはいる。百周年を迎えようとするこの企業の拠点、大阪ミナミには、巨大なはさみと足を動かすカニやぼらやのふぐちようちん、くだおれのおどけた人形の奏でる独特のけばけばしさ、おいしい食べものがある。そして芸人世界のいささか古風な礼儀正しさと実力主義、笑いをおくり出し続ける企業文化の原点はどこかゆとりを感じさせる。

春休みに、帝京大学の欧州キャンパスを訪れるのが恒例となつて十数年となる。今年も東京なら真冬といえる寒さに、家々の庭先でぼてつと桃色の花をつける桜を後に戻ってきた。桜の種類が違うだけでなく、咲く時期や植え方、刈り込みのかたちなども違う。日本人の桜に対する思い入れとのへだたりも当然のこと、むしろ道すがら足元に咲くヒヤシンスや水仙に愛の想いを託す風土なのだ。

同じように、人間も違ってくる。よくいわれる異文化である。もってまわった言い方や、あいまいな受け答えは誤解どころか、不満や攻撃さらには軽視や軽蔑の対象となることは、存分に経験してきた。北イングランドの穏やかな川面に映る、上部に凹凸の続く城郭は、鱗のような鎧に身を固め、闇の中襲ってくる敵を見張る兵士たちを思い起こさせる。つねに戦闘的な民族性は、繁栄の芝居小屋で太鼓と共にあだ討ちに向かう浪士を喝采する調和的な日本の国民性とあきらかに異なる。

こんなことに敏感になったのも、私にとつて今よりはるかに女性が珍しかった駒場での原体験にさかのぼる。白髪のかきた懐かしいクラスメートに出会い、その活躍を目の当たりにするたび、「ことなり」の存在をさまざま形で認知し、これを成していく駒場教養学部のDNAかと思ふしだいである。

(教養学科七一年卒、大学院人文科学研究科(修士課程)、大学院総合文化研究科(博士課程満期退学))

駒場友の会第五回総会のお知らせ  
 日時：五月二四日(土) 十七時より  
 場所：駒場コミュニティセンター・プラザ北館二階  
 当日十五時よりコンサートも開催する予定です。  
 詳細は追ってお知らせいたします。

穏やかな日差しの中でゆったりとくつろぐことのできる

フランス料理 **ルヴェ ソン ヴェール 駒場**

駒場友の会会員・会友の皆様がお食事の際に注文なされたコーヒーは、支払いの際に会員会友証を提示下さいますと無料となります。

営業時間 11:00 ~ 14:30, 17:00 ~ 21:00  
 Tel: 03-5790-5931 / Fax: 03-5790-1902  
 駒場ファカルティハウス内

駒場友の会 会費納入のお願い

二〇〇八年度の年会費をまだお納めいただいていない方が若干名いらっしゃいます。年会費は、会員は四千元、会友は二千元です。どうぞよろしくお手続き下さい。

詳しくは、駒場友の会事務局までご連絡下さい。

〇三―三四六七―三五三六